モンゴルの地下資源開発の現場
ーモグラのように生きる「ニンジャ」の女性たちー

今岡良子

モンゴル国営放送が 2010 年に制作したドキュメンタリー作品を紹介します。ボールヒンツァガーンという若い女性が、モグラのように地下を掘り、土砂を袋に詰めて運び出し、妹がその土砂を水で洗い、金をさらい出す。彼女らの母は、ボールヒンツァガーンの 2 人の子どもの面倒をみている。これは、抜け出せない地下労働者の暮らしを描いた作品です。この仕事をしている人をモンゴルでは「ニンジャ」[1]と言います。鉱山会社の正規労働者ではありません。鉱山会社が「合法的」に採掘権を得た金鉱山の周辺で、採掘許可を取らずに、砂金を集め、ブローカーに売り、生計を立てている人々です。「合法的」と書いたのは、人間が民主的に制定した法律に従って行われる採掘も、不法に行われる採掘も、自然から見ると、破壊であり、収奪であるという点では同じだからです。

なぜ、彼らを「ニンジャ」と呼ぶかというと、アメリカのテレビ番組に Teenage Mutant Ninja Turtles というアニメがあり、亀の甲羅を背負うアニメの主人公が、不法採掘者のニンジャが大きな緑色のたらいを背負って歩く姿に似ているということからです。

この作品の背景を説明に入る前に、これを見た時に思い出した国営放送の番組についてまず書いておきたいと思います。その番組の名前は忘れましたが、ゴビ地域に住む「нөхөргүй（ヌフルグイ）」、夫のいない女性戸主の遊牧民家庭についてのドキュメンタリー番組で、1990 年の民主化後に放送されたものです。モンゴルの自然条件は降水量の多い北から南へ、森林地帯、森林草原地帯、草原地帯、ゴビ草原地帯、砂漠地帯と変化します。モンゴル人は、「ゴビで人間として暮らすより、ハンガイで牛として生きた方がいい」と言います。ハンガイとは、北部の森林や森林草原地帯を含む地域で、湖があり、河川が流れ、草の豊かな植生を指します。ゴビ草原や砂漠地帯では、井戸などの生活インフラの整備が遅れ、しかも大型家畜のラクダを主に飼うため、北部と比べると、その労働は非常に過酷なものでした。一度に 100 リットルもの水を飲むラクダのために、手で水をくみ上げる労働のきつさを想像できるでしょうか。遊牧民の男性でも、若いうちから関節炎を抱え、兵役や進学の機会を使って首都ウランバートルに移住する傾向がありました。こうして、ゴビ草原や砂漠地方の男性人

---

[1] ニンジャとは、Монгол "НИНЖА" нар （モンゴル『ニンジャ』たち）
<http://www.ikon.mn/p/6ly> この web ニュースに写真があります。日本語で読めるものとしては、佐々木健悦『現代モンゴル読本』（社会評論社、2015 年）、鈴木由紀夫「ニンジャ」『現代モンゴルを知るための 50 章』収録（エリア・スタディーズ、明石書店、2014 年）

口が減り、女性を戸主とする遊牧民の家族が生まれていきます。一方、冬の保存食となる乳製品を作る女性は、子どもを労働力に、生き続けることができます。四季の営地を移動する時、力仕事は、その時だけ兄弟や親戚から借りればいい。私が初めてゴビ遊牧社会を訪れた1989年、それはモンゴルの社会主義の最後の年でしたが、女性戸主の家は、社会の中で差別されることもなく、家畜を飼い、国家調達の義務を果たし、社会を支えているという意識を持ち、堂々と暮らしていました。しかし、家族全員が働く遊牧民の家では、1日中放牧に出る役割の人が、近隣の遊牧民の家を訪ね、情報を収集して帰ってきます。女性戸主の家では、家から遠く離れる外周りの仕事に時間を割けなくなり、社会の変化に関する情報に接する機会が少なくなります。1990年以降の民主化、1991年の市場経済への移行、ネグデル（農牧業協同組合）の解体、家畜の私有化など、次々と新しい法律が制定され、政策が展開される中、女性戸主の家では理解ができていない人が多くいたことを私は強く印象に持っています。その国営放送の番組は、社会主義の時代、国家調達を供出するためにネグデルの家畜を飼い、社会を支えてきた女性たちの問題を解決することもなく、民主化により華々しい時代に向かっていく政府や都市の人々に対して、警鐘を鳴らしたかったのだろうと思います。ゴビに置いてきぼりにされる人々に光を当て、民主化はこの女性たちを救うのか、と問いただしたのでした。[2]

2 ゴビ砂漠に生きる遊牧民女性に関する詳細は、今岡良子「ゴビ砂漠を生きる女性たちと」、『地球のおんなたちー女から女へ、女を語る』（大阪外国語大学女性研究者ネットワーク編、嵯峨野書院、1996年）

国営企業の民営化は、そのほとんどが失敗し、労働者は職を失い、住んでいた企業の寮も失います。日本でもNHKがストリートチルドレンの問題を3本も作品にするほど、市場経済移行後のモンゴルの貧困問題や家族の崩壊が深刻な問題になっていました。

一方、地方は、1991年に農牧業協同組合が民営化され、遊牧民は家畜を自分のものにすることができ、家畜を増やして豊かになっていきます。地方の県や郡の中心地に住む人々も家畜を飼う遊牧民になる人が出てきます。

しかし、1999年の冬から、北極から爆弾低気圧がモンゴル高原に居座り、ゾドが起こりました。ゾドとは、寒波や大雪、また、干ばつによって家畜が大量死することを言います。1999年から3年続けて、およそ1000万頭近い家畜が死にました。社会主義の時代は、大雪に覆われた地域には上空から軍のヘリコプターが乾草や食料を落として救援するなど、社会的に解決していましたが、個人の財産になった家畜に対して、政府は社会主義の時のようには動きませんでした。

筆者の定点調査地域バヤンホンゴル県ボグド郡では、1991年以降、人一倍に働いて、家畜を増やした遊牧民ほど、損害が大きく、遊牧民をやめようと考える人が出てきました。地方の県や郡中心地に住む人には公務員の他、畜産物の流通・販売の業種が多く、1999年のゾドではまず、畜産物商人が地方で暮らしていけなくなり、首都に流出していきました。その次に、教員や病院関係者が、首都移住を始めました。

ゾドの後、筆者の調査地では[3]、家畜を失った遊牧民は、他人から家畜を借りて、増やすことを考える人、ジャガイモを植えて、販売したお金で、母家畜を買ってきて、繁殖することを考える人、近くの金鉱山へ行き、砂金を採るニンジャになって日銭を稼ぐ人が現れました。ニンジャという出稼ぎをしても、ある程度のお金を貯めると、もともと遊牧民だった人は、遊牧民に戻ることの方が多く、市場経済移行後に遊牧民になった人は、採掘に必要な機械や道具を買い揃え、専門の採掘業者になって仕事を続ける人も一部にはいましたが、相変わらず、手にした金をその日の食い扶持に費やすしかない人は多くいました。金の採掘地はもともと何もない草原ですが、ブローカーの店ができ、食堂やバー、カラオケの店も並びます。家畜を飼って暮らす場合は、食料はもちろん自給できますし、燃料も家畜の糞を乾かして自給します。しかし、家畜を持たない人が採掘地で暮らすには、水、食料、燃料をすべてお金で買うことになります。

このドキュメンタリー作品に登場するお母さんは、家畜を飼って暮らしていたようです。

---

[3] 大雪や酷寒、干ばつなどによって家畜が大量死することを、モンゴル語で「ゾド」という。1999年以降のゾドについては、塩見英恵「2000年春のゾド報道から見えるもの」「モンゴル研究」19号、ゾド後の遊牧民の暮らしの変容については、2001年、今岡良子「2002年夏のツェルゲル　―ゾドの後はゴールド・ラッシュ、首都ラッシュ」「モンゴル研究」20号、2002年。「2003年夏のツェルゲル　雨の年、ホルショーの再生か？」「モンゴル研究」21号、2003年を参照してください。

理由はわかりませんが、家畜を失い、娘2人と一緒に、金の採掘場に流れ着いて、働くようになります。その娘2人は、この採掘場で大人になり、モグラのような暮らしからなんとか這い上がろうとします。長女は、結婚をきっかけに脱出をはかりますが、自分と子ども2人を残して去っていった男を待ち続け、次に優しくしてくれた男にも期待し、また捨てられます。女姉妹が毎日掘り出す土砂の量は少なく、採れる金の量も多くありません。ブローカーの経営する店で、日々の食料と薪を買い、借金を返しながらの労働が続き、地中の仕事から脱出することができないでいます。

社会主義の時代、鉱山労働者は、専門学校や大学で鉱山に関する知識と経験を身につけた専門家で、過酷な労働故に、一般労働者よりも5年以上早く年金がもらえるなど、労働者として尊敬された職種でもありました。資本主義社会に移行してすぐ、1994年に鉱物資源法が制定され、国内資本家により鉱山開発が始まります。先に述べた1999年のゾドをきっかけに、企業が採掘する金鉱山の周辺で、そのおこぼれを手ですくうようにニンジャたちが砂金を集めるようになりました。2006年、鉱物資源法は、戦略的に重要な鉱山を定めた上で、外国資本が投資を容易にする一方、国内への再分配を優位に展開しようという意図を込めて改定されました。その時、「モンゴル人は黄金のベッドの上で眠っている」(地下資源を持ちながら、利用しないまま生きてきた)、「モンゴルの国民は、アラビア人のように石油で豊かに暮らせるようになる」という夢が語られました。外国の投資による鉱山開発が、モンゴルの経済発展の基軸であるという認識が、国民的に共有されていきます。一方、外国からモンゴルに入ってくるのは、資本だけでなく、中国や北朝鮮からも労働者が来て、「合法的に」鉱業を行う鉱山で働くようになりました。

2010年に放送されたこの作品は、モグラのように地中を掘り、砂金を採る女性に光を当て、モンゴル経済を支える鉱山の片隅の実態から、これが「豊かに暮らせる」ということなのか、と厳しく批判しています。それは、社会主義時代に経済の基盤となって働いたゴビの遊牧民女性の問題を突きつけて、彼女らを置いてきぼりにする民主化とは何かと批判した視点を共有していると思います。次に作品の書き起こしをまとめました。ぜひ、ご一読ください。

＊＊

ドキュメンタリー映画　Care women ／モンゴル／　文字起こし

＊＊

ウブルハンガイ県、オヤンガ郡、ウルテーン フンディー

ボールンヒーツァガーン： 穴の下から土砂を運びあげ、水で洗って、金を取り出して、売って、暮らしています。しかし、穴の下、20 メートルの穴に降りていくのは辛いことです。こうして綱をつかんで、降りる時、足が痛くて辛いです。つかむ時、手が痛くて辛いです。上にいる人は、落とさないように体重をかけてひっぱりながら降ろします。そうして地中、何メートルも深いところから 1 人が引っぱりあげ、1 人が土砂を運んで来ます。

こんな恐ろしく深い、何メートルもの穴に入っていくのは、怖くて、怖くて仕方ないです。崩れる恐れがあるので、そうなる前にとにかく急いで土砂を掘りだします。もう崩れるなあ、崩れたらどうしようと心配しながら土砂を袋に入れて上にあげます。でも、金が出てくる袋も、出てこない袋もあります。上にひきあげた袋から金が出ないと、また別の穴から入ったらどう、と言われます。たった 1 つの袋から金が出てこないのは当前でしょう。2、3 袋分、掘り出して、上にあげるのだけど、生身の人間だから辛いです。壁が崩れることが怖いです。手が痛いです。横穴を這って掘っていくのは、首が辛いし、手足が冷えます。腹這いになる体勢は辛いです。

私は、17 才でニンジャ（許可なく砂金を採る人）になりました。小学校 3 年生で学校をやめました。お母さんは私に「家畜の仕事をしなさい。家畜の番をする人がいないのよ」と言うので家畜の世話をしていました。しかし、その家畜がいなくなったので、砂金取り場に来ました。でも、今、砂金取り場に来て、いいことなんかなかったと思います。母さんと、妹と、土砂を掘って、食べものを買うお金を作って、なんとかこうやって生きているだけです。

掘った土砂は地上まで運びあげ、水で洗います。水がなかったら、水を運んで来ます。ドラム缶の下で火をおこし、水を沸かし、凍っている土砂を溶かしながら金をさらい出します。こんな寒い日は本当に辛いです。私たち娘は母について来て、こんな危険なことをして暮らさないといけなくなりました。

土砂は、水を運んできて、洗わないといけません。水なしで砂金をとりだすことはできません。たらい 1 つ分の土砂を水で溶かしたり、汚い水を捨てたり、すすいだりします。すすぐ水は何度も使いまわしします。ドラム缶にくんだ水を入れておき、たらいにとって使います。黄色いタンク 2 つ分の水（40 リットル）で 4、5 袋の土砂を洗っています。1 台のバイクで 4 つの黄色いタンク（80 リットル）の水を運びます。そうして一日中、水くみの仕事をしています。砂金を洗うのに 1 トンの水が必要です。こうして、50、60 袋分の土砂を洗って、ようやく金が採れます。

お母さん： 行ってください

隣人： お母さんが「お茶を飲んで」って呼んでいるよ。

ボールンヒーツァガーン： はい、ちょっと待って、行くから

私の二人の子ども。これは長女。妊娠したって言ったら、彼は「ちょっと家に帰って来る」って言って、戻って来ませんでした。待って、待って、ずっと待っていたけど、帰って来ないので、母さんが長女の面倒をみてくれました。

次の彼はバヤホンゴル県出身で、ちゃんと夫婦として暮らそうと思っていたのに、ある日、兄さんが来て、「弟が大変だ」と言って連れて行きました。兄さんは「またここに帰らせるよ」と言ったけれど、本人は戻って来ませんでした。音沙汰がなくなりました。ずっと、待っていたけど、ここには帰って来ませんでした。

長女は4歳で次女は2歳。2人とも入院するほどの病気をしたことがあって、母はこの子たちのことも心配してくれています。

ボールンヒーツァガーン： ミルクを飲ませに来たの。

彼には「薬代だけでも持って来てくれるだろう」とか、「たった1人の娘に薬を買ってあげなさい」、「靴を買ってあげなさい」、「ズボンを買ってあげなさい」と言って近くまで帰って来てくれないかと思うことはあります。

私自身は、もう帰って来ない人をどこから帰ってくるとか、どこに行ったかとか、思ってもしかたないと思っています。

お母さん： 寒いかい？

ボールンヒーツァガーン： 寒い。凍えそう。特に足が寒いわ。

お母さん： もっと土砂を運んで来たら、出る金の量も増えるし、自分たちにとっていいのでは。

ボールンヒーツァガーン： これは普通の仕事じゃない。凍った地面を掘るのは無理、外でも中でも、火をおこさないといけません。普通の土地に小さな穴を掘るのとはわけがちがう。火をおこすために、まず、薪を買わないといけないのです。

お母さん： ちょうど良い時にもっと頑張って、借金を払い、米や粉などの食料代を用意したらいいのだけど。これからもっと寒くなったら地面が凍ります。凍りつく前に少しでも

お金を蓄えて、自分の分も半分あげて、一緒に小麦粉や米を買って、冬を越すための肉を買って、食べられるだけでいいのです。

お母さん： はい

ボールンヒーツァガーン： わあ、寝ているよ。キス。

お母さん： コップを持って、2つでいい。二重にして持ちなさい。私が立ちましょう。わあ、この子は寝ているわ。はい、連れて行って。向こうへ。

長女が15、16歳で、次女は7、8歳でしたねえ。家畜がいなくなり、砂金取り場に来て、砂金取り場で食べ物を買うお金をこしらえるようになりました。私がなんとかここに来た時、この娘たちはまだ幼い子どもだった。私は9メートルの穴と15メートルの深い穴に入ったことがあります。そのうち、大きな穴に入ると心臓がドキドキするようになってきました。

ここへ来て、こんな暮らしを続けるより死んだ方が楽だと思ったことは何度もありました。「死ぬまで我が子を手離さなさい」と言いますが、この小さな娘たちを見ながら可哀想で泣いたことは本当です。1人は学校を出たが、1人は学校を辞めさせました。長女には学校を卒業させてあげられませんでした。家畜がいた時に、学校に入れておけばよかったと思います。小学校3年生じゃなく8年生を卒業させておいたらよかったのにと思います。義務教育の8年制の卒業証明書があれば、役場の清掃の仕事でもやれるでしょう。そんなことを思って、何度も後悔しました。

今は、後悔しています。子どもの教育のために、私は何ということをしてしまったのかと思います。この2人の孫は、学校で勉強させたいと思います。学校を出たら、お母さんを助けるために何とかするでしょう。お父さんに捨てられたので母親しかおらず、辛いでしょうよ。2人の子どもをお父さんは2人とも捨てていってしまった。女の人が1人で2人の子どもを育てるのは大変なことです。だけど、できる限りのことをしてあげようと思います。

少し前は、2、3袋の土砂があれば、なんとか食べ物を買うお金にはなると思って頑張りました。今は、牽引車にいっぱい土砂を運んで、砂金を集めても、食べ物を買えるだけのお金になりません。いつの間にか、牽引車で土砂を運んで砂金をとるようになりました。

緑色のデールの男性（ニンジャ）： この娘と（ボールンヒーツァガーンのこと）何年も前から近所で、このバローン・ズーン谷ではお隣同士でした。土砂運びの仕事は、女子どもにはきつい。とてもきついよ。女の人が1袋の土砂を運ぶといっても、少なくても、約25、30キロの袋を持ちあげることになる。穴の深いところから運びあげるのは難しいよ。

ここで、働いている女性はボールンヒーツァガーンだけじゃなく、いっぱいいる。ニンジャとして働いているうちに、妊娠した女が土砂を運んでいるのも見ました。目をそむけたく

なることもたくさんある。寒い冬、雪嵐の季節になっても、食べ物を買うお金をつくるために、凍えきった地中で土砂を掘り、凍えきった体には、薪に火をつけても温まらない。それは土砂を溶かす水を温めても、ニンジャの体まで温めないんだ。

ここには、家畜を失った遊牧民や、家畜はあっても貧しい遊牧民、また、定住地からもたくさん来ています。夏は急に増える。一気に増えます。

大学生たちは夏休みに、次の学期の学費をつくるために来て、また帰っていく。私たちのように貧しいものは、ここで残り、冬を越すことになります。

私は 50 代になった。私のようなものも、ここで人生が終わるだろうと思うが、ここの若者にとっては本当に暗い未来に向かうしかないと思います。この砂金取り場で、若者が暮らし、家をもち、家族をもち、一定の賃金がもらえるちゃんとした仕事につくことはできません。そうでしょう。ああ、この人は 8 年もニンジャをしたので、年金を何パーセントか増やしてあげようとか、数パーセント上乗せしてあげようとか、そういうことはありえないでしょう。だから、若者たちの将来はとても暗い。ここで出会って結婚し、子どもが生まれている。モンゴルの人口はこうして増えているんです。

ボールンヒーツァガーン： 土砂を洗い、金をさらって、それを店へ持って行きます。数グラム、零点いくら、0.2 という小数点以下の単位。夏は、これぐらい働くと、0.3 グラムぐらいある。冬は、寒い中頑張っても、01。店に借金があると、それを返済して終わるし、借金がないと収入になります。それで、薪を買う、食料を買う、燃料を買うと全部なくなります。店では使う分だけ買います。1 日の仕事分にあわせて買い物をするようにしている。

店員： 0.3 g で 12,100 トグゥルグになる。その内から 1,650 トゥグルクを引く。

ボールンヒーツァガーン： ガソリンの 600。

店員： ガソリン 600 トグゥルグ、玉子 1,200 トグゥルグ、石炭 6,000 トグゥルグ、粉 500 トグゥルグ、ケーキの残り 250 トグゥルグ、残高は 1,800 トグゥルグ。

店員： 大変ですよ。貧しくなって、学校も卒業してないのだから。この 2 人の娘は、文字が読めません。1 人は、なんとかサインだけでも書ける。もう 1 人は、サインも書けません。そんな子どもたち。しかし毎日、土砂を運んで、生活している。金があれば、持って来る。金がとれなかったら、うちから借金して何とか過ごしている人たちだよ。

ボールンヒーツァガーン： 昨日の薪は 3,500 トグゥルグ、ニンジャといっても人の子なので、シャンプーを 2 つ買って頭を洗いました。玉子やインスタントラーメンは 6,000 トグゥルグになります。0.2g は 8,000 トグゥルグなので、何も残りません。昨日の夜に薪を買ったが、今日も買う。金の採れ具合にあわせています。

お母さん： 寒いかい？

娘たち： 寒い。ノミオ、薪をとってちょうだい。

ボールンヒーツァガーン： こんなニンジャの暮らしをずっと続けたくないです。どうしたら逃れられるのか、どうしたら2人の子どもを学校に行かせることができるのか、と考えています。学校を卒業して、自分の力で、明るい将来に向かっていけたら一番良いと思う。しかし、入る学校はどこにあるのか。どうやって、養っていくのか。お母さんは年を取っているし、いつかどこかで転げ落ちて死んだら、私たちの4人が親なしで生きないといけなくなります。

妹： お姉さんは穴へ降りた。

お母さん： そう、崩れなかった？

ボールンヒーツァガーン： 大丈夫だった。でも降りる時に手と足が痛くて大変だった。

妹： 今日は金が少ない。買い物しないで借金を返した。

ボールンヒーツァガーン： 薪の借金を払った。

妹： お母さん、明日の朝、早く起こしてね。お願いね。

ボールンヒーツァガーン： ん？ どうしたの？ 顔を洗ってあげないと汚れているわ。

2人の子どもに冬の寒さを感じさせたくないし、飢えの苦しみをさせたくない。辛くてもニンジャの仕事をやり続けて、食べさせ、暖かい服や靴などを買ってあげようと思います。

借金できたかなー、食べ物なくて大丈夫かなー、っていつも心配します。

子どもの頃からニンジャだけど、子どもの頃は、そんな心配することなかった。

彼氏ができて結婚するという希望があったけど、実家に帰って来るって行って戻らなかった。もし、学校を卒業できたなら、ニンジャじゃなく清掃の仕事でもやる可能性があったと思います。首都ウランバートルへは行ったことがなく、県中心なら行ったことあります。今までの一番良い思い出というと、ナーダムの祭を見たこと。

＊＊

今日、モンゴル国では10万以上の人が手で金を掘り、ニンジャとして暮らしている。
そのうち60%の人がボールンヒーツァガーン/Booronhii tsagaan/のように、
子どものために、土にまみれて働いている女性です。

＊＊

編　　集　D.オユンチメグ
監　　督　L.アリオンジャルガル
撮　　影　J.ニャムスフ
撮影助手　U.ソミヤ
協　　力　ウブルハンガイ県オヤンガ郡
　　科学アカデミー持続可能な小規模鉱山プロジェクト

2010年　MNB モンゴル国営放送 制作
ABU TV DOCUMENTARY CO PRODUCTION CARE (Change Asia Rescue the Earth)